
人形劇

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形劇

【Nコード】

N9006D

【作者名】

石子

【あらすじ】

人形たちは人形劇にとっても誇りをもっています。

その町には人形劇の劇場がありました。

人形たちはいつもいろいろな世界をみせてくれるので、たくさんお客さんが来ます。

それは遠くの異国の物語だったり、不思議な世界のお伽噺だったり、日常を切り取ったような身近なお話だったり。

子供たちだけでなく、この町の人たちはみんな人形劇が大好きなのです。

人形たちもそのことに誇りをもっているので、人形つかい達と力を合わせていつでもすばらしい劇を観てもらいたいと思っていました。

彼らはいつものようにおしゃべりです。

今日はどんなショーを見せてくれるのでしょうか？

「私、ほんとうは遺産なんていないのよ。おじい様が私のことを想って遺してくれたお金もお屋敷も、数々の装飾品も他の人から妬みをかうだけ。一緒に住んでいたおばさまは今まで散々酷い仕打ちを私にしていたのに、急に媚を売るようにやさしくなったのよ。魂胆がみえみえで、もううんざりだわ」

アルメリタは伏せ目がちにそう言いました。

それでもよく通る彼女の声は劇場の隅まで響いて聞こえます。

長いまつげですらとした体型の彼女はいろいろな衣装に身を包み、いつもこの劇場の主演です。

今日はお屋敷の遺産のお話でしょうか。

そして、その彼女に向かい合うように立っている二人の男性。ひとりはおハンサムな顔立ちで、王子様の役がとても似合いそうな

トーマ。

もうひとりはいさ丸い体型で、やさしい顔立ちのコーネリアです。「アルメリタはなにも悪くないのにね。でも、このままでは君の命を狙う人達がでてるかもしれない。そのことがとても心配だよ」

トーマが大袈裟な動作とともにそんな事を言います。

「そ…そうだよ。アルメリタが危ない目に遭うかもしれないなんて考えただけでぞっとするよ」

コーネリアも遅れを取るまいと、前に出てアルメリタに語りかけました。

そんな二人を少し満足そうにちらりと見ると彼女はもう一度目を伏せたのでした。

「ああ。二人ともありがとう。私のことを心配してくれるなんて、やさしいのね」

言いながら中央に移動します。

「私も屋敷にいてもいつも不安なのよ。私、父も母もはやくに亡くしたでしょう？ おじい様は私を溺愛していたから遺産をすべて私に遺してくれたんだけど、本来なら遺産を受け取る権利があった人は私を殺そうとしているんじゃないかって思うの」

アルメリタはまさに悲劇のヒロインそのもの。悲しそうにそんなことを言いました。

トーマもコーネリアもそれを聞いて、やはり悲しそうに俯きます。

「やはり、おばさまは私のことが憎いでしょうね。せつかくおじい様と一緒に暮らしていたのに、一銭も遺産をもらえないなんて。でも私がもし死ねば、遺産はおばさまのもの」

アルメリタは意味深にそんなことを言います。その言葉を聞いてトーマとコーネリアの二人はハッと顔を上げました。

「あのおばさんは前からアルメリタのことを好きではないようだったからね」

「私、どうしたらいいかしら？」

「ボク達だってなんとかしてあげたいけれど……」

会話が途切れ、しばらく沈黙が支配します。しかし、すぐに顔を上げたのはいつも穏やかな表情のコーネリアでした。

「アルメリタが危険な目に遭う前に、おばさまの方を何とかしたらどうかなあ？」

アルメリタとトーマは体ごと彼の方を振り向きます。二人には彼の言うことの意味がわかっていているようでした。

それを感じ取ったのか、コーネリアはそのままセリフを続けます。
「おばさまが死んでしまえば、他には遺産を受け取れるほど近い親族はいなかったはずだよね？例えば事故にみせかけて亡き者にしてしまうのはどうかなあ？」

コーネリアは変わらぬ表情でそんなことを提案します。

「私、そんな怖いことできないわ」

「もちろんアルメリタは何もしなくていいんだよ。ボクがなんとかするから」

「あら。そんなに私のことを想ってくれているなんて、うれしいわ」
アルメリタは嬉しそうな声でコーネリアに近づきます。それを見ていたトーマも一瞬思案するように動きを止めたかと思うと、すぐに二人に向かって言いました。

「コーネリアだけでは不安だな。僕もアルメリタのために協力するよ。計画を立てるのは僕のほうがきつと得意だからね」

「トーマまで、私のために協力してくれるなんて、とても心強いわ。非力な私はなにもできないけれど……」

「君は何もしなくていいんだ。僕とコーネリア二人でなんとかするからね。……まずはおばさんを人気の無いところに呼び出して……」

計画は順調に練られていくようです。

そんな様子を、お客さんの入っていない静かな劇場の隅で聞いていた人形たちはひそかに言葉を交わし合います。

「アルメリタはいつも私を操って、とても素敵な声で素敵な演技を

つけてくれるけれど、とても狡賢いのよね。でもそういうところも好きだわ。もう長い付き合いだもの」

「僕たちが出演する劇なんかより、彼らの方がよほど劇的な展開を向かえそうだね」

「でも、この劇場もアルメリタの受け継いだ遺産のひとつだもの。計画がうまくいけばきつとここはこの先も安泰だよ」

「ええ。どんな手段を使っただっていいわ。彼らがこの人形劇場をとっても誇りに思っているのは確かだものね」

「これからも良い劇を続けてくために、是非、彼らの計画が成功してほしいね」

人形達のおしゃべりは続きます。

もちろん、その声は三人の人形つかい達には聞こえませんが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9006d/>

人形劇

2010年10月8日15時12分発行